

# 青森県における余市式土器について

上 野 茂 樹

## 1 はじめに

青森県における縄文時代中期後葉の土器編年については、現在でも様々な議論があり、それは円筒土器が大木式土器の影響をどのように受け入れたかという観点から検討が進められてきたといえる。

土器様式の変化は、土器の変化にとどまらず、当時の文化の変化もうかがわせるものであるが、なぜ南の土器文化の影響ばかりが目立ち、北からの土器文化の流れは目立ったものを見せていないのであろうか。

ここでは、縄文時代中期後葉における、南の土器文化からの影響ではなく、北の土器文化からの流れをかいま見る材料のひとつとして、青森県出土の余市式土器を概観してみたい。

## 2 余市式土器について

余市式土器は1935年（昭和10年）に北海道余市町大谷地貝塚から発掘された資料に基づき形式設定された。大沼忠春（大沼 1996）によると、器形は円筒形を基本とし、体部にくびれがあるものや底径に比べて口径の大きい深鉢型を呈するものもある。口縁は平縁で、底部は平底をなす。口縁にそり折り返し状の貼付をめぐらす。体部にも数段の箍状に貼付をめぐらすのが特徴とされる。文様は、全面に縄文を施すものがほとんどで、縄文には羽状縄文と斜状縄文のものがある。ほかに、刺突文、縄線文、沈線文などが加えられているものもある。胎土は少量の繊維を含むものがあるが、多くは含まれていないとされている。

編年の位置については、型式設定以降、中期後半に位置づけられていたが、津軽の山田野B式が共伴することによって後期初頭とされるようになり、またそこから変更されてきているといえよう。大沼（大沼 1989）では、それまで余市式土器群に含められていた（高橋 1981）ノダップ式、レンガ台式を余市式から分離し、それらの位置づけを中期末葉とした。そして、余市式は後期に属し、6型式（余市式 小野幌式 伊達山式 タブコブ式・古 タブコブ式・新 手稲砂山式）に分かれるものとされた。余市式に山田野B式が共伴することによって後期初頭とするもの（大塚・戸沢編 1996）もあるが、山田野B式を大曲式とし、その位置づけを中期末とする（鈴木 1994・1996・2000）近年の見解によれば、余市式は中期末に位置づけられることになる。以上のように、余市式の編年上の位置については、見解が統一されていないというのが現状であろう。

したがって、ここでは、本県の報告書のなかで余市式及び余市系並びに余市式の影響を受けたと報告された土器を紹介することとする。

## 3 本県の状況

これまでに余市系土器及び余市式土器の影響を受けた土器の出土が報告されているのは、今別町山崎遺跡（青森県教委 1982）、青森市長森遺跡（青森市教委 1985）、平舘村尻高（4）遺跡（青

森県教委 1985)、六ヶ所村沖附(2)遺跡(青森県教委 1986)、青森市小三内遺跡(青森市教委 1994)である(図1)。

山崎遺跡からは、胴部半ばにふくらみをもつ深鉢型の土器が出土しており、中期末葉から後期初頭に比定されている。文様帯を刺突文や沈線、0段多条の圧痕文で区画し、口縁部は無文、胴部には0段多条の斜縄文を施している。

長森遺跡からは、口縁部がゆるやかに外反する平縁深鉢形土器が出土している。条線文(縄線文のことか?)と粘付文(貼付文のことか?)で文様を構成し、口縁部文様帯は2条1組の縄線文により形成されている。ボタン状の貼付を配し、その間を縄線文で結ぶ。胴部はRLの原体による単節斜縄文が施され、底部にはスダレ状の痕跡が残る。胎土には砂粒を含んでいる。中期のものと考えられている。

尻高(4)遺跡では、第2号特殊竪穴遺構の覆土と遺構外から円筒型深鉢形土器が出土している。表面には粘土紐がバンド状に数段巡らされており、胴部下半と口縁直下に多くみられる。全面にLRの原体による縄文が施されているが、表面は縦位回転、バンド上は横位回転されている。胎土には小礫・砂粒を含んでいる。中期の土器として分類、記述されているが、明確な時代決定については、共伴土器がないことから明言を避けている。

沖附(2)遺跡からは壺型土器が出土している。口頸部がやや内反し、体部下半が張り出している。RLの原体を縦位回転させ施文した後、胴部の張り出し部の下位に粘土帯を1条巡らせている。粘土帯は指でなでて調整している。

小三内遺跡からは、第8号住居跡内の堆積土から深鉢形土器が出土している。口縁部がやや外反し、胴部半ばがややふくらみをもつ。口頸部とふくらんだ胴部にバンド状の貼付を施したのちにLRの原体を横位回転させ、さらにバンド上に連続刺突が施されている。レンガ台式に比定されており、共伴土器については堆積土からの出土のため特定していないが、最花式、大木10式併行と見られる土器が同じ堆積土内から出土している。

以上が筆者の目に触れた、県内から出土した余市系土器群である。大沼に従えば、山崎遺跡・沖附(2)遺跡・小三内遺跡はレンガ台、長森遺跡はノダップ式、尻高(4)遺跡が余市式土器に比定できると思われる。

#### 4 おわりに

本稿は余市式土器の編年を検討するのが目的ではないが、明確な共伴例がないことから、余市式に対応する土器形式は明らかでない。また、出土例は5遺跡にとどまることから、中期後半における北海道の土器文化からの影響は、大木式土器の影響に比べるとかなり小さなものだったのではないかと考えられる。

気候の温暖化が終焉し、寒冷化が徐々に進行していく中で、なぜ北の土器文化より南の土器文化がより多く受け入れられたのだろうか。南の土器文化にとって、寒冷化は誤差の範囲内だったのだろうか。あるいは、自然環境の変化など問題にならない適応性の高い土器文化を確立していたのだろうか。これらについては、今後の資料の増加を待ちながら、検討を進めていきたい。

最後になるが、資料については成田滋彦氏から御教示賜った。記して感謝申し上げたい。

# 参考文献

- |            |      |   |                    |
|------------|------|---|--------------------|
| 青森県教育委員会   | 1982 | 山崎遺跡  | 青森県埋蔵文化財調査報告書第68集  |
| 青森県教育委員会   | 1985 | 尻高(2)(3)(4)遺跡                                       | 青森県埋蔵文化財調査報告書第89集  |
| 青森県教育委員会   | 1986 | 沖附(2)遺跡   | 青森県埋蔵文化財調査報告書第101集 |
| 青森市教育委員会   | 1985 | 長森遺跡  | 青森市の文化財            |
| 青森市教育委員会   | 1994 | 小三内遺跡   | 青森市埋蔵文化財調査報告書第22集  |
| 大塚初重・戸沢充則編 | 1996 | 余市式土器   | 最新 日本考古学用語辞典 柏書房   |
| 大沼忠春       | 1981 | 北海道中央部の縄文中期から後期初頭の編年について                            | 考古学雑誌66 - 4        |
| 大沼忠春       | 1989 | 北筒式土器様式   | 縄文土器大観 第1巻 小学館     |
| 大沼忠春       | 1996 | 余市式土器   | 日本土器事典 雄山閣出版       |
| 鈴木克彦       | 1994 | 大曲1式土器  | 縄文時代研究事典 東京堂出版     |
| 鈴木克彦       | 1996 | 大曲1式土器  | 日本土器事典 雄山閣出版       |
| 鈴木克彦       | 2000 | 東北地方北半部の中期・後期区分に関する編年学的研究(上)<br>- 大曲1式などの中期末葉の土器群 - | 縄文時代11 縄文時代文化研究会   |
| 高橋正勝       | 1981 | 北海道南部の土器  | 縄文文化の研究4 雄山閣出版     |

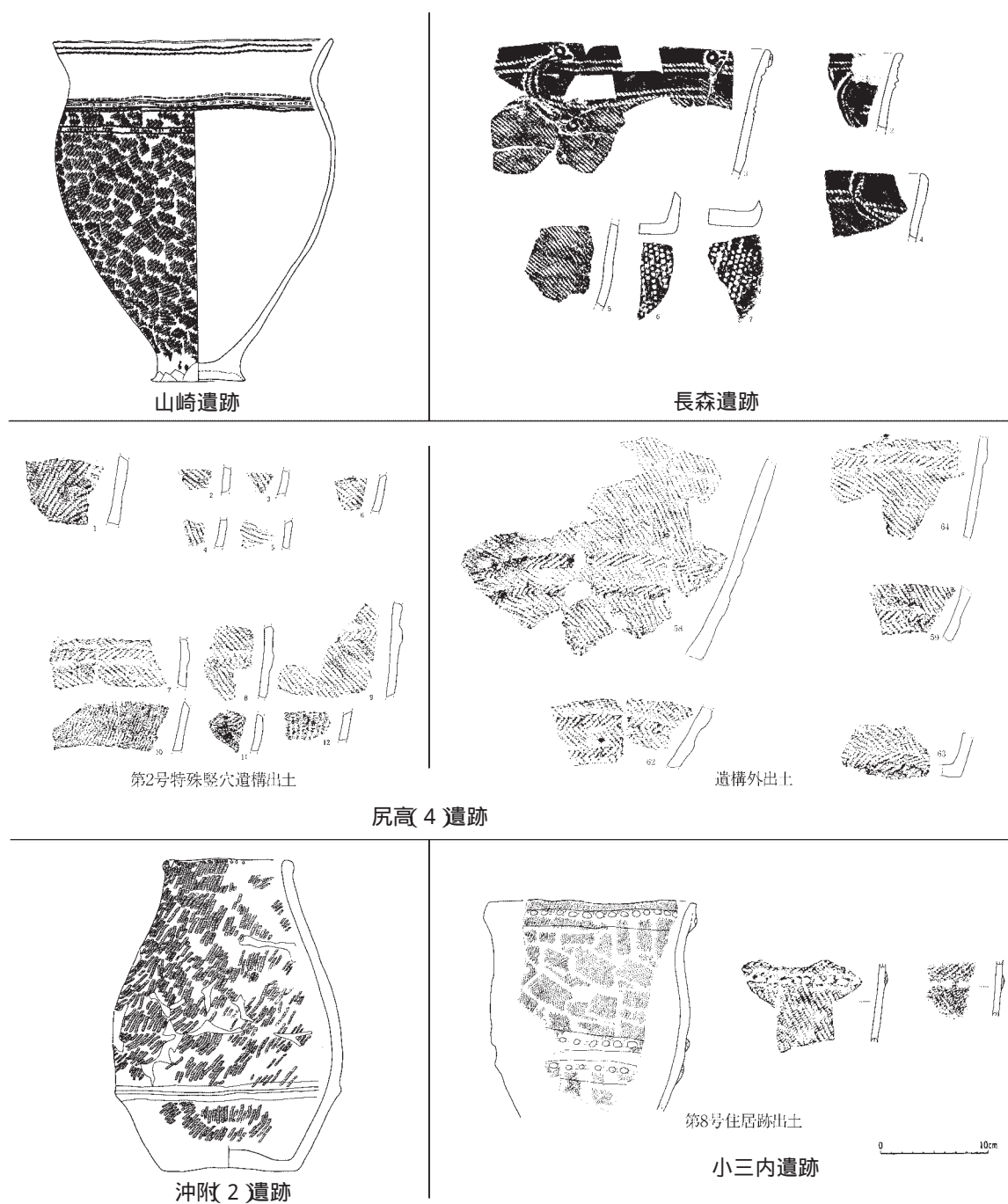


図1 青森県出土の余市式土器